

身体の死後に意識を存続させる

試みについての哲学的考察

冲 永 宜 司

はじめに

近年の脳神経科学とコンピュータ科学の発達は、身体の後にも意識を存続させる試みを、空想から現実の領域に移しつつある。本論では、身体の後、様々な科学技術を駆使して、意識を存続または再生させようとする、近年議論されている試みの問題点について、哲学的な観点から考察する。

意識を、死後存続させる欲求は、「私」を存続させる欲求であると考えられる。現在それは、「私」そのものではなく、「私」の情報についてのアップロードを、脳のニューロン同士の接続パターンの解明と複製によって行う試みなどに典型的に見られる。無論ここにはまず、ヒトの脳内のパターンすべてを解読する技術上の困難がある。二番目に、より根本的な課題として、意識は脳の物質的な組成にもとづかず、ニューロンの接続パターン、つまり情報状態にもとづく理由は何な

のか、ということがある。意識の土台は、物質なのか、情報なのかという問題である。さらに根本的な第三の問題として、「私」の情報がすべてコピーできたとして、その情報を持つコンピュータは、「私」になるのか、という問題がある。

本論では、最初の問題がいずれ可能になると仮定し、二番目の問題では情報を土台とする立場を採用する。そして三番目の問題については、「私」は置き換わらないと見る。しかしそれは、「私」の魂がコンピュータに乗り移らないということではなく、意識が根本的には、「私」の所有物という次元を超えた存在である、という考えによる。それは言い換えれば、「私」の意識のコンピュータへのアップロードが実現される次元は、「私」の存続という当初の目的が無意味になる次元ということである。

そこで本論では、「私」の移し替えが、「私」の個性性、唯一性を超え、それらを無意味化させて行く試みであることを

示す。それはまた、「私」の個性性にもとづく論理が限界に行き着く事態においても垣間見られることを確認する。

第一節 身体の死後も意識を存続させる試み

「私」の心をコンピュータにアップロードさせる試みにおいては、「私」の意識をコンピュータに移す、という段階が考察の上で重要となる。これは「私」とコンピュータを接続させて、「私」の意識がそのコンピュータを動かすという段階ではない。「私」そのものを元の身体とは別の場所に移し替える試みである。そして、この段階がもし可能になれば、あとは「私」が宿ったコンピュータが、可動のロボットなりの中に入ればよいので、この移行は容易である。

たとえばニューロンの配線地図つまりコネクトームを作成し、それをコンピュータにアップロードすることで、意識をコンピュータに内在させる試みは、ハーバード大学の神経科学者ケン・ヘイワースなどが計画している⁽¹⁾。しかしコネクトーム作成のためには、ヒトでは「一〇〇〇億のニューロンと一〇〇兆以上のシナプス」があり、それらの網羅が必要で、実際ヘイワース自身、現代の技術では不可能と言う。これは技術的困難、つまり「はじめに」第一の問題に属す。

この困難の簡略化として、刺胞動物ヒドラのニューロンの活動すべての画像化に成功した、コロンビア大学の神経科学者ラファエル・ユーストの試みがある⁽²⁾。その画像を見れば、ヒドラがどのように動くか理解できる。彼によればヒトの脳のニューロンの活動の画像化は、ヒドラのニューロン三〇万

個から、ヒトニューロン八六〇億個にまで複雑化すればよい。この画像化された情報をコンピュータにアップロードすれば、意識をコンピュータに移せるという。

さて、コネクトームのアップロード不可能性が単に技術的不可能性なら、将来のコンピュータの処理速度の飛躍的な増大が、全シナプス変化の精密、正確な書き取りを可能にすれば、コネクトームのアップロードは、当人の意識自体のアップロードとなるかもしれない。

そこに問題が残るとすれば、原理的不可能性である。この不可能性とは、画像化されたニューロンのアップロードが、ニューロン所有者の意識になるのかという問題である。ここには、

(1)、コンピュータに組み込まれたニューロン情報は、機能のための情報にすぎず、意識になり得るのか（「はじめに」

第二の問題）、

(2)、もしそれが意識になるとしても、「私」のニューロンシステム複製が、「私」の意識になるのか（「はじめに」第三）、という問題がある。

ユースト自身、(1)の問題に関して、ニューロンの活動がどうして意識を生むのか、根本的なところが理解できていないと言う。こうした問題を含むので、この段階が、不死の実現に関して最も哲学的な問題が集中する所だと考えられる。

この、脳内情報のアップロードと意識のアップロードとの違いを考察するにあたり、プリンストン大学教授セバスチャン・スンの考えるコネクトームへの見解を参照したい⁽³⁾。

コネクトームとは、脳のニューロンの配線 (wiring) 状態であり、情報のネットワーク状態を指す点では他の論者と同じである。

だが、仮にヒトのすべてのコネクトーム情報を獲得しても、先の(1)、(2)と同様に

(1)、コンピュータ内で、ヒトのニューロン活動をシミュレートすることが、そのコンピュータ内に何かの意識を生じさせることになるのか、

(2)、もしコネクトームによってコンピュータ内に意識が生じたとしても、その意識はそのコピー元の人自身、つまりその人の「私」を内在させるのか、
という情報と意識との存在論的な問題は残る。

一般に、身体の物質上の組成が同じであれば、同じその人であるという考えがある。これは唯物論に相当する。それに対してスンはアップローディングを試みようとする立場を、「あなたはあなたの原子なのではなく、原子の配列されるパターンなのだ」(と表現する。情報状態が同じであれば、物質的組成が何であれ、同じその人と考えるのである。コネクトームとは脳の物質的組成ではなく、情報のつながり方のことだとスンは考えるからである。よって脳とは異なる物質によって、脳内情報がアップロードされ、つなげられても構わない。この情報は物質ではないからである。

これは情報と「私」の意識の存在論的な関係を問題化させる。たとえば、「現在の両親が結婚したから私が生れた」という考えの背景には、遺伝的な情報が「私」と同じであれば

「私」になるという思想がある。すると反対に、「私」と異なった遺伝情報の個体しか存在しなければ、「私」は宇宙に登場しなかったことになる。それをさらに厳密化したのがアップローディングの思想である。それは、仮に原子レベルまで「私」の身体と組成が同じ個体があるとしても、情報の上で異なった状態であれば、「私」ではないと考える。

昔、情報は靈魂と見なされたかもしれないとスンは言う。情報は物質とは言い難い抽象的な何かだからである。彼は「自己とは非物質的な実質、つまり物質よりも幽霊じみた何かに基礎づけられている、という考えに帰ることで、我々は全くもとに戻ったのである」と言い、その上で情報を「新たな靈魂」(5)とも表現する。

こうした「私」の意識の捉えどころのなさを認める一方で、スンは「トランスヒューマニズム」という運動に言及する。それは自分の脳が持つ情報を保存させ「ヒトという種を改造することを求める」「幅広い運動(6)を指し、「不死」(7)を可能にする試みだという。しかし、その「不死」が「私」の命の保存を意味するなら、この試みは閉じた意識をそのまま永続化させる欲求にすぎない。その願望はどれだけ満たされても、さらなる欲求を生み出し、尽きることはない。しかし、「不死」の命が「誰」の命でもなく、普遍的な命だとすれば、「私」を永遠に生かすことは、かえって閉じた意識を開かせ消し去ることを条件とする。この普遍的な命は、誰のものでもあり、また誰のものでもないからである。そこでは閉じた個体としての「私」は意味を失う。情報が「私」であるとするとするなら、

閉じた個体性は保持されなくなると考えられるからである。それを以下で考察する。

第二節 「私」を永遠に保存する試み

ここで保存が試みられる「私」とは、代替不能な唯一無二の個体としての「私」である。この不死が、当初からの目的だからである。しかしそれは、「私」の情報や「私」の記憶とは微妙な関係にある。もし保存できるとしても、技術的には後者の保存でしかない。したがって、「私」がどこまで情報や記憶に還元されるかが、「私」の永久保存の可能性を左右させる。そこで「私」を保存する試みについて、次の3つを区別して考えてみたい。

①私の脳を超低温保存し、科学が発達した将来に再生させてコンピュータ等に接続させる(8)。

②私の脳におけるすべてのニューロンの配線状態を、保存可能な繊維で置き換えて行く。

③私の記憶や情報をコンピュータにアップロードさせる。

古典的な唯物論から見ると、①では「私」は保存されるが、③は記憶の保存であつて「私」の保存にはならないと思われる。「私」の記憶内容をすべて言語化してハードディスクに書き込んでも、「私」にならないと思われるのと同様である。しかしその間の②に関しては、はっきりしない。「私」という主体の座を担うものが保存されるか否か、微妙だからである。では何が①と③とを分けているのか。

この問いについて答えるため、以下AとBのふたつの立場

から、①から③への違いを考えてみたい。

A「私」の記憶や情報のアップロードは「私」のアップロードにはならない。つまり「私」は、記憶や情報で済まされない、それ以上の何かであるという立場。

ここでは、記憶や情報が「私」だというのは、私の個体的側面の無視と見なされる。この場合、①なら「私」は保存される。③では保存されないことになろう。②では微妙である。このAでは、客観化される世界は「私」ではない。つまりその世界に「私」はいない。そして客観的世界の構成物によって「私」が形成されることはない。それが「私」を、「私」の所有する記憶や情報に置き換えることを拒んでいる。その意味で「私」は世界の例外であり、代替不能な個体である。そして、「私」が孤立して存在するゆえに、「私」の存在と「私」の無とが明確に分けられる。

B、私の記憶や情報がコピーされれば、「私」が保存されるという立場。

ここでは私の情報や性質が究極的には「私」の当体に相当するので、私の記憶や情報のアップロードは、「私」のアップロードの必要十分な条件になる。こうなると、「私」という個体的存在は、究極的には存在しないことになる。この考えでは、①②③のどれにおいても「私」は保存される。

このBは、「私」の個体的な意識や主観をも否定する点で、徹底した唯物論に見えるかもしれない。しかしこの唯物論的な見かけからは、突き詰めるとさらに二つの立場が分かれてくる。

B α として、「私」、主観、意識を最初から認めない立場。これは一見徹底した唯物論である。「私」を構成していた情報や、「私」の機能しか存在しないと見なすからである。たとえば、「私」は一台のパソコンであり、世界はネットワークであると想像してもよい。しかしB α は、一人称の「私」やクオリアを扱えないという問題を含む。また、世界をすべて客観化する唯物論は、その世界を観察する「私」を世界の例外として持たざるを得ない⁽⁹⁾。

そこで、この例外としての「私」さえも取り除くのがB β であり、そこではすべてが情報、記憶となる。つまり「私」は徹底的にどこにも居ない。しかしその上で観察者やクオリアを世界に含めるとなると、主観的な「私」が同時に世界であるという、唯心論、汎心論の傾向が立ち上がってくる。「私」が世界の例外的な観察者ではなく、しかも情報や記憶の中に主観的なものを溶け込ませるならば、世界そのものが「私」という構図へと、自ずから帰着するからである⁽¹⁰⁾。

したがってB β では、「私」の個性や代替不可能性が成り立たない一方で、他の「私」との存在論上の垣根も取り払われる。このような汎心論的なB β では、「私」がいまいことと、すべてが「私」であることが同時に成立する。そうになると、個体としての「私」を閉じたものとはできないため、閉じた「私」の不在と「すべて私」との一致が、この唯心論的宇宙を形作ることになる。そしてこのB β の構図は、B α が主客両面を備え、客観的世界の例外としての「私」を消去した状態にも相当する。

それゆえB β の世界は、死がない状態でもある。死とは、個体としての単独の「私」が前提になるからである。こうなると、「私の死後存続」のために「私」をアップロードする当初の意味が薄らいでくる。

B β のように、心はあるが「私」はない、という状況は、もとの「私」の記憶と情報をアップロードしたコンピュータについて、それが「私」なのか、それとも「私」ではないのか、という問いが意味を成さない状況でもある。そこでは純粹に「私」がなくなるのでもなく、もとの身体かコンピュータかのどちらかが「私」を独占するのでもない。また、唯一の「私」がふたつに分裂するのでもない。そしてこの理解困難は、「私」の論理の限界を示している。

この理解困難は、先に確認したAの個体的で閉じた「私」の論理を、私たちが前提にしているためである。それに対してBでは、「私」を閉じる論理がない。さらに、Bで内面性が度外視されればB α 、内面性と不可分であればB β となる⁽¹¹⁾。B β において、「私」はあるのでもなく、ないのでもない。

しかし実際、それがもともと、生物の歴史の多くを形作っている姿なのである⁽¹²⁾。「私」の死という観念、「私」の分裂の不可能、「私」が他の誰かでもあることの不可能という考えは、まだAに縛られているために生じている。そして、「私」をアップロードさせて不死にしようとする試み自体、世界における代替不可能な個体としての「私」(＝A)という構図に縛られている⁽¹³⁾。

第三節 死はなぜ生じたのか

すでに確認したように、「私」の死は、「私」の個性性を確保したことによって生じた。それは、代替不能な「私」の存在(A)においても、また純粹に客観的な物質の世界をその外から観察する主観(Ba)、という構図においても生じていた。本節では、それらの構図は後から作られたものであり、その構図以前では、死が未だ成立しないことを確認する。前節のBβはそれにあたり、その次元では「私」と「私の情報」との区別がなく、ものと「私」とアップロードされた「私」とのどちらが本物か、という問いも意味を失う。

まず考察したいのが、生物進化における「死の進化」である。もともと死は生物の中になかった。それは生物学的には、初期の単細胞モネラには死がなかったという事実に見出され、単細胞生物の分裂の過程で死体は生じないこと、そして単細胞生物内に、細胞の死はプログラミングされていないことがそれを形作る。免疫学者ウィリアムR・クラークは言う。

「しかし、単細胞生物が死ななければならないと表明する何物も、それらの生物の中にはプログラミングされていない。死は生と同時に登場はしなかったのである。」⁽¹⁴⁾

死は遺伝子の中のプログラムによるならば、そのプログラムがなければ不死である。つまりこの死は細胞の死、生物学的なシステムの死に関わる。つまりこれは主観や「私」を度外視した、生物体という観点からの死であり、そこに内面性は度外視されている。

では生物の内面性(その生物であること)を考察に加えるとうなるか。これは、死の哲学的な条件の考察であり、前節のBβに関わってくる。まず、単細胞生物の分裂過程から死は見られないのは、そこには特定の個体の成立がなく、それゆえ個体の死という出来事がないからであった。この個性化とは、特定個体の客観的識別可能性であり、そこに内的観点を加えるならば、「私」は他の何者でもないという「私」の唯一性の意識となる。この意識ゆえ、「私」が死して無くなる、という意識も生じる。進化の中で、個性化が生じ、死が登場し、生死の区別に到ったことになる。

この、生命において「死がない」という状態がなぜ元来の姿なのか、その哲学的な理由について考察したい。これは、単細胞生物個体(P)が一度分裂して、Q1、Q2というふたつの単細胞生物個体になったとき、Q1、Q2のどちらが個体Pなのか、という問いの中に暗示される。言い換えれば、個体Pはどこへ行つたのかという問題である。Q1、Q2とも個体Pだと言えるし、両方とも個体Pではないとも言える。Q1、Q2ともPのDNAを受け継いでいるという意味では、個体Pと同じであり、その意味で個体Pである。しかし、Pの個性性そのものは、Q1、Q2になった時点でどこにもなくなってしまう。その意味で両方とも個体Pではない。

そして、前者の場合では、個体Pは存続しており、死んでいない。原生生物に死はないとは、この意味である。後者の意味では個体Pはすでに消滅している。つまり、個性性を当てはめた場合には、原生生物にも死はある。しかし、このよ

うな死は、個性性という人為的概念に起因するにすぎない。つまり、素朴に生物を観察する限りは、死の問題は個性性という後づけの構築物に帰責する。

単細胞である原生生物を、ヒトの一卵性双生児に置き換えてみても、個性性のしくみは同様である。ふたりの一卵性双生児は同じDNAを持っているが、最初の受精卵が一度分裂してふたつに別れた後、それぞれ別々に発生していったとすれば、どちらが元のDNAで、どちらがコピーされたDNAかは問題にならない。ここまでは単細胞生物の場合と同じである。つまり情報としては両者とも最初の受精卵であるが、個性性としては、両者とも最初の個体ではない。

ここまでは一卵性双生児の客観的説明である。問題は、最初の受精卵個体に「私」が内在していると仮定した場合である。もし一度目の分裂前のDNAに「私」があり、分裂後に「私の情報」がもう一方の卵にコピーされたと考えたと、「私の情報」という観点からすれば、両方とも「私」である。そのときどちらがもとの「私」で、どちらが「私のコピー」かは、区別がつかない。

ここで情報としてのDNAと「私」との大きな違いは、DNAは分裂しても、情報が同じならば同じDNAだと見なせるのに対して、「私」が分裂して、「私」が同時にふたつになる事態は考えられないことである。これが情報の客観的性質と、「私」という内的存在の違いが、集中的に現れる所である。その意味で、「私」には、DNAや生物の諸々の客観的情報とは根本的に異なった、個性性の性質が属していると

える。「代替不能の私」はひとつしかなく、「私」がこと同時にあそこにもいるとは、論理的にあり得ないという考えが個性性の性質を形作っている。

しかしこのあり得なさは、「私」がひとつで完結した、実体的存在だという前提に立っている。これは論理的前提である。そして「私」の単独の実体性は、この頭蓋の中の意識内容が、その頭蓋にない意識内容と比較して、圧倒的に判明可能なことにもとづいている。

すると反対に、他の頭蓋内の意識内容が、この頭蓋内の内容と同程度で同質的に把握されるなら、「私」が単独で完結している、という考えの根拠はなくなる。それは「私」の実体性の解除にもつながる。これは「私」と「私ではないもの」との間の明確な区別の解除でもあり、「私」の単独性、完結性が、論理の産物にすぎなかったことの暴露である。そして、この区別の解除、消去は、「私」の存在と非存在との区別の消去にもつながって行くと考えられる。「私」の「存在」という観念も、この単独で完結している「私」を前提とするからである。すると、先に検討した分裂後の個体が「私」なのか「私ではない」のか、そして分裂後に「私」が存在するか、それとも存在しないか、という問いは、答えが見つからないのではなく、問いの前提の方が誤っていたことになる。同様に「私」の死と不死との区別も、単独で完結した「私」を前提とする。

この区別以前は、「死の進化」以前の状況と同じである。ここでは「私」の存続も、「私」の消滅もない過程であった。「私」

を他から区別する枠組みが未成立である限り、「私」の消滅が未成立だったからである。しかしこの過程全体は、「私」が未成立だからといって、機械的な無機的過程ではなく、「私」なき、生きた過程なのである（ $B\beta$ に同じ）。これは「私」の生が閉じた頭蓋の中にあり、「私」以外の生は確認不能、という思考の枠組みからは理解できない。そこでは「私」がある（でもなく、ないでもない¹⁵）。またそのとき、「私」が生きる明確な「意味」はなく、反対に、生は「無意味」であるという判断も生じない。明確化された「生」の有と、それに対立する「死」の無とが互いに対立関係に入らない。このように、「私」という独立した個体的存在の方を後出とする見解は、生物学的議論にも、人類学的議論にも見出される¹⁶。

第四節 「私」に属する情報から、情報が「私」であることへ

前節では、単独の個性性が未成立の生命は、「私」という敷居のない連続性の中で存在していることを見た。このつながりは、もしコンピュータネットワークに内的状態を認めるなら、特定の個体を持つ情報が、他の個体と共有され、それがまた分化されて行くことに相当する。そこでは特定の閉じられた頭蓋の中の「私」はなく、また反対に意識のない無機的情報伝達がなされるのでもない。そこでは普遍的な生命情報システムが広がることになる。

ただし、現代のコンピュータネットワークと、「私」の意識とは、いくつか異なる点が考えられる。

1 自発的なフレーム作成がコンピュータネットワークには

なく、「私」にはある。

2 クオリアがネットワークではなく、「私」にはある。

3 実体的な「私」がネットワークではなく、「私」にはある。これらのうち1は、特定のフレームを前提にした人工的なコンピュータの活動が、その特定のフレーム内での計算や最善策の導出ではなく、そのフレーム自体を変更し得るのかという問題に関わる。たとえば、人間の将棋名人を負かす将棋ソフトは、それがいくら早い計算速度と、あり得る指し手を尽くす計算の広さを持っていても、将棋のルール自体を変えろという発想がそこから出て来るのか。

コンピュータが自らフレーム自体を変更できるとすれば、コンピュータと人間とは、ともに認識の枠組みを無限に広げる可能性があることになる。これは、コンピュータの知性がいずれ人間を超えるシンギュラリティの地点をむかえ、コンピュータに人間が支配されるという未来予想図を可能にさせる。さらには、コンピュータが人間の持つ知的情報を自ら取り入れ、ついには意識までも取り入れて自らの一部にして行くことも考えられる。そしてこれも逆説的ながら、人間の意識を永遠化させる姿のひとつである¹⁷。

この未来予想図は、フレーム変更の能力が、コンピュータにはないので不可能、という意見もあるだろう。しかしヒトとコンピュータとの両者とも、究極的には物質と情報のシステムから成る点で同じなら、なぜそうした本質的相違があるのか、という疑問が生じる。物質からシステム形成されている点で同じなのに、一方には可能で、他方には不可能なこと

があるのはおかしいからである⁽¹⁸⁾。この問題に対しては、反対に両者の間に本質的な違いを認めず、コンピュータがフレイムを超えられないなら、人間も認識フレイムを本質的に超えられないという見方もできる。人間は自らの認識を形作るフレイムを自ら見ることができないので、自らの限界を知り得ない。しかしコンピュータを限界づけるフレイムは、その作成者である人間に認識可能なので、コンピュータと自らとを区別しているに過ぎないことになる。

2は意識のハードプロブレムの問題である。コンピュータネットワーク上の情報は、確かに意識を伴う神経システムが持つ情報との類比が可能である。しかし、意識が内的状態やクオリアを持つのに対して、コンピュータの人工的なネットワークはそれらを持たない、という意見があり得る。これだと、意識情報のコンピュータへのコピーは、意識の内的状態のコピーにはなり得ない。

しかし、コンピュータネットワークを含めた情報状態一般に、客観的側面と現象的側面(内的側面)を普遍的に見出すことで、ともに情報状態である人間の神経ネットワークとコンピュータネットワークとの間に、根本的な違いを認めない立場もある。D・チャルマーズのような、情報状態一般に右記の両側面を認める立場は、たとえばその「サーモスタットの心」⁽¹⁹⁾に見られるように、情報状態の本質に意識状態を見ている。これだとヒトの情報のコピーは、意識のコピーの条件を満たす可能性がある。

そして、意識のコピーが仮に可能だとして、そのコピーが

「私」のコピーなのか、という問題が3である。「私」の情報の一部がコンピュータにコピーされ、「私」とそのコンピュータがリンクされても、コピー元の、身体に宿る「私」は変わらないと思われるだろう。それは、「私」の情報の一部がコンピュータ内にあるとしても、その情報を操作するのはコンピュータ外の「私」だと思われるからである。

しかし、コピーされる「私」の情報を次第に増やし、ついには「私」のすべての情報がコンピュータにコピーされたとき、コピー先の「私の情報」と接続されたコピー元の「私」は、コピー先の情報を「私」のものではないと判断できるだろうか。つまり、「私」の情報を持ったコンピュータと「私」の頭蓋とが、上限なく互いに情報伝達できるとしたら、どちらが「私」かを内的に区別できるだろうか。むしろ、どちらかに「私」の所在を求めることの方が、意味を成さなくなるのではないか。たとえば単細胞モネラが分裂するとき、分裂に先だって複製されたDNAの切り離しが行われるが、その複製元と複製先との情報の区別はない。したがってこの切り離しが行われるとき、もとの単細胞モネラの「私」がどちらに行くか、という問いは意味を成さない。

同様に、「私」の頭蓋と、「私」のすべての情報を持つコンピュータとが接続された状態で、どちらが「私」かの内的区別はない。その限りで、両者を切り離したとき、どちらが元の内的な「私」を引きつぐかという問いは、意味を成さない。ここでは「私」がふたつに分けられるのではなく、「私」が分かれる、分かれないうという区別が成り立たないのである。特

定の頭蓋の中の情報にのみアクセス可能な「私」は、各々を独立した個体として閉ざして考えたとき、はじめて生じる²⁰⁾。

このように、「私」と「私ではないもの」との区別消滅の見地に立つと、元の「私」に属していた情報は、頭蓋とコンピュータの接続後、元の「私」に属するのか、コピー先のコンピュータに属するのか、判断できなくなる。すると、元の頭蓋とコンピュータと、どちらが本当の「私」なのかは決定できない。したがって、完全にコンピュータに情報をコピーし終えた「私」の身体が減んだ時、「私」は死んだとも言えるし、死んではないとも言える。これは単細胞モネラの「私」や、二体の一卵性双生児に分かれる最初の一体の受精卵の「私」の場合と同様である。

コピー元の「私」は、コンピュータから切り離された後、自分の身体が減ぶとき、「私は死ぬ」と思うかもしれない。しかしコピー先から見れば「私の身体面がなくなるのであって、「私」は相変わらず存続するとなろう。しかしこれは、切り離しによって両者の個性性が復活したと見なされているせいである。それに対して、コピー元の身体も、コピー先のコンピュータシステムも、各々単独での個性性が前提とされていなければ、どちらかの物質的身体がなくなるとき、「私は死ぬ」ことはない。

着目すべきは、こうした「私」の死を回避するための試みは、その試みの完成において、不死実現のもともとの動機であった「私」の個性性の存続を、すでに昇華、解消させてしまっていることである。言い換えれば、「私」の個性性が消

滅する次元において、「不死」は成立する。つまり「不死」の成立と、「不死」への動機の消滅とは同時である。そこでは「私」の情報を含んだネットワークとしての意識の遍在だけが存続する。「私」の生と死、「私」の存在と無という二分法は、「私」の個性性の枠組みが消し去られた情報空間には適用できなくなってしまうからである²¹⁾。

こうした意識の遍在は、結局、形を変えた唯心論に陥るのではない。確かに、唯心論的な宇宙では、「私」の中に宇宙が映る構図になり、そのとき「私」は存在するが、「私」のない宇宙は存在しない。しかし、唯心論的宇宙の「私」を、「私」という特異点ではなく、主観性をともなう神経的ネットワークとしての宇宙全体と読み替えたとき、このネットワークがそのまま、宇宙の全体となる。ここで「私」は存在するのでも、存在しないのでもない。宇宙に「私」以外が存在しないからである。実際、唯心論的構図においても、宇宙に徹底的に「私」しかないのであれば、「私」の存在は問題化しない。「私」は極微であるがゆえに消滅するのではなく、「私」が徹底的な全体であることによって、「私」という意味が消失するからである。ここでは、「すべてが私であって私ではない」。そこはBで確認したように、「私」の個性性という思想が成立し得ない次元だからである²²⁾。

これに対して、純粹に客観的な唯物論的宇宙(Ba)の内部に、「私」の居場所はない。宇宙の客観化、物質化を徹底化させ、それでも宇宙について考える「私」を設定しようとすると、「私」は宇宙の外部に押し出されてしまうからである。

そこで「私」は宇宙の中になく、かといって存在しないのではない。この矛盾したふたつの論理空間の狭間に「私」は置かれてしまう。この解消のひとつの方法が、「私」を宇宙の例外とはせず、むしろ宇宙の中に遍在させてしまうこと（B β ）なのである。これは物質宇宙の全体がすなわち「私」となり、それは既述の唯心論的宇宙と重なるに到る。

このように唯物論的宇宙は、その究極の所で、徹底化された唯心論と重なる。「意味がない」宇宙とは、死んだ物質の無意味さによって形成される。決定論的な無目的性として宇宙が存在し、主観、生命、意識が活動する意味はそこでは発見できない。しかしその無意味な物質的宇宙を眺める「私」は宇宙の「外」に存在する。これが唯物論的宇宙である。

それに対して、物質的宇宙を眺める「私」を宇宙と一体化させると、「私」と客観的物質という区別がなくなるので、「死んだ物質」を成り立たせている土台が失われ、「無目的」という考えの根拠がなくなり、「無意味」という意味が消滅する。「この無意味な宇宙」を眺める視点がないことによって、宇宙全体から「無意味」が失われる。超越的な視点や超越的世界が徹底的にないことが、宇宙の「無意味」ということも奪い去るのである。

これは結局、この世界自身を超越の次元と見なす立場に道を開く。世界を自発的、有意味と規定することで超越に到るのではなく、反対に決定論、無意味を成り立たせていた枠組みがなくなることで、超越性が奪われた無意味な世界の根拠が消滅するのである⁽²³⁾。

おわりに

身体の死後も意識を保存しようとする試みは、コンピュータの進化発展によって、いずれは可能になる可能性ある。しかし、これが実現した際には、この「私」の存続という、当初の死後存続の動機が無効になる可能性が、本論で考察されたことであった。代替不能な「私」の存続が当初の目的であった一方、コンピュータ内への「私」のコピーは、「私」の情報についてのコピーでしかない。しかし、情報のコピーが完全に成功することで、「私」の意識の保存は、ある意味で達成された。それは、「私」と「私」の情報との境界がなくなる次元の実現であり、閉じられた個体としての「私」の存在についての考え方を根本的に変えるものだった。それは「私」が否定され、消去されることではない。「私」が情報という姿で世界と一体化し、世界という実在が「私」となることである。そこに「私」と世界との区別はない。したがって、「私」が存在しない代わりに、「私」が否定され消去されることもない。それは、「私」の存在と「私」の非存在との区別が無効になる次元でもあった。

実際、「私」の非存在は、「私」の存在の側からは表象できない。同様に非存在から存在を表象することもできない。互いはまったく没交渉なのに、存在、非存在という概念だけが互いの対立関係を生じさせている。この概念によって、「私」の死後の無と、「私」の生の有とが対立し、身体死後、「私」が生き残ろうとする欲求が生じる。だが、そうした「私」は

本来は無いというのが、本論で考察したことであった。

それでも、「私」は有るのでもなく、無いのでもないと言われるとき、どのような意味で有り、どのような意味で無いのか。そこには、情報とは区別された実体的な「私」は無いしかし実体的な「私」を拡大し、宇宙が「私」であるに到ったとき、そうした状態での「私」は有る。そのとき『私』＝宇宙の外部は存在しないから、「私」以外の何かは存在せず、「私」という概念は意味を失うのだった。

【註】

- (1) たとえば Goldstein, Evan R. *The Strange Neuroscience of Immortality*, The Chronicle Review, 2012. <https://www.chronicle.com/article/The-Strange-Neuroscience-of-Immortality> を参照。Haywards, Ken の研究紹介と評価を含む。
- (2) 「BS世界のドキュメンタリー 不老不死を追いかける 男たち」NHK BS1 二〇一七年二月二十六日放映。
- (3) Seung, Sebastian, *Connectome: How the Brain's Wiring Makes Us Who We Are*, Boston, New York, Houghton Mifflin Harcourt, 2012.
- (4) Ibid., p. 270.
- (5) Ibid., p. 271.
- (6) Ibid., p. 272.
- (7) Ibid., p. 271.
- (8) これは実際にクライオニクスと呼ばれ、アメリカではこれを用いた延命財団もある。——一九六度の液体窒素の中に、脳や遺体全体を入れて保存し、科学が発達した未来の

技術で、脳をロボット等の中で再生させる試みである。

(9) この意味で、B α の唯物論は、Aの構図とも矛盾しない。「私」を世界の中に認めない限り、「私」は世界の外の超越的な何かになる点で、B α とAとは同じだからである。ただしB α は身体や脳をも徹底的に物質化し、クオリアも認めないのに対して、素朴にそれらを認めるAとは区別される。

(10) このような情報ネットワークとして普遍的に広がる心によって宇宙を捉え直した立場に、物理学者中込照明（一九五二）の「唯心論物理学」がある。そこでは各々の主体はモナド的な役割で宇宙を担い、すべては心との関係においてあり、客観的にのみ存在するものは考えられない（中込照明『唯心論物理学の誕生 モナド・量子力学・相対性理論の統一モデルと観測問題』海鳴社、一九九八年）。

(11) Aは「超越論的自我」を認める立場であり、自我の本体は世界から超越している。

B α は古典的な唯物論であり、世界は客観的で、決定論的な物質で、意味を持たない。しかしそれを観察する隠れた自我だけは、主観的で自由な意味主体なので、B α は物質世界しか認めない立場でありながら、その観察主体だけは必ずと世界から外れてしまふ。

B β はこの主体をも世界の中に入れ込む立場で、すると「私」＝「世界」となる。こうして主体は世界のどこにもあり、どこにもない。しかもそれは客観的かつ主観的、決定論的かつ自由、無意味でありかつ有意義という、矛盾した性質を同時に含む。むしろ、客観、決定、無意味というB α の三要素が、未だ成立せず、すでに成立していない世界である。本論ではこのB β の例として、「唯心論物理学」の立場を挙

げたが、この矛盾を通じてしか示され得ない限界概念としての主体は、L・ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』5.632で「主体は世界には属さない、そうではなく、それは世界の限界である」と言われるものにも近い。『論考』のこの前後で述べられる主体も、独我論と実在論という全く矛盾する概念が一致する地平に開ける何かである。

- (12) Clark, William R, *Sex & the Origins of Death*, Oxford UP, 1996, p.54, etc.

- (13) 私たちは自我を非時間的な何かだと思うことで、それを実体的に考えてしまう。そのような非時間的観念によつて、世界から超越した「超越論的自我」も考えられてしまう。しかし実際、自我は時間的、連続的であり、非実体的である。時間の中で非実体的に広がる自我を、非時間的、実体的なものとして錯覚することを「滝にかかる虹」と的確に表現したのは、ウィリアム・ジェイムズである (James, W, *The Principles of Psychology*, The Works of William James, Harvard UP, 1981, p.593)。

- (14) Clark, 1996, p.54.

- (15) 分裂後のどちらの個体が「私」なのか、答えられないこと。「私」は存在するのか否か、答えられないこと。これらは「私」の論理が自ずから限界を示す場所が生じる出来事である。その場所は、「私」を前提にした思考がもはや妥当しない実在の次元である。見方を変えれば、「私」の論理が妥当する所の方が、限定された実在の範囲でしかないと言える。拙稿「概念枠としての物質と心」芦名定道・星川啓慈編『脳科学は宗教を解明できるか』春秋社、二〇一二年、二二〇—一四頁、「記号としての『私』—私がいるのでもなく、

いないのでもなく」。

- (16) 紀元前一千年以前の人類は、「意識のない意思決定」を常態とし、個々人の意識的判断を超えた「幻聴」からの命令により、言わば自動的に行動していたというジュリアン・ジェインズの説などは、これにあたる。ジェインズはこの行動を担う精神を、現実の言語使用を担う精神と超越的な他者の声を聴く精神から成る「一心室精神」と名づけた (Jaynes, Julian, *The Origin of Consciousness in the Breakdown of Bicultural Mind*, Mariner Books, 2000)。神々が「幻聴」を通じて語るだけなら、「私」はなく、「私」の死もない。

- (17) この未来予想図の実現の前には、コンピュータが自らのフレイムを自発的に改変できる創造性を持つ必要に加え、2のクオリア問題、3の「私」問題も立ちはだかることを念頭に置く必要がある。

- (18) フレイムに捉われない「創造性」はAIでも作り出せることを、AIの発達を、生物進化における「最適化」の過程と類比させることで主張する立場もある。生物進化では環境に最適な種がそのつど生き残ってきたが、それは環境に最適な器官、機能を、フレイムに縛られずに「創造」することで成し遂げられ、AIもそれが可能だと、この立場は主張する。Shahnan, Murray, *The Technological Singularity*, MIT Press, 2015, p.99.

- (19) Chalmers, David, *The Conscious Mind*, Oxford UP, 1996, p.295.

- (20) 生物を物理法則に従属するものと見なし、脳を情報処理装置と見なすことを、自由意志や不死の否定ではなく、まったく逆に宇宙の展開を担う生命の根源的な役割の肯定

だと見なす立場もある。そこでは物理、情報状態の方が生命状態の内に包含されているので、「私」の実体性も必要がない。Tipler, Frank, J., *The Physics of Immortality: Modern Cosmology, God and the Resurrection of the dead*, Doubleday, 1994, p.vi etc.

(21) 個体的な「私」という枠組みは、情報空間においてのみならず、一体の生物の内部でさえ最初からは存在しない。たとえば、マーギュリス(一九三八—二〇一一)などによって提唱された細胞内共生説は、動物細胞内のミトコンドリアのような細胞内小器官はもとも別の生物であり、共生の必要からその細胞とひとつになったという。ヒトも、無数の別生物の集合体ということになる。そして、各々のミトコンドリアの「私」が、共生場所である細胞の「私」と、最初是一緒の場所に別々の「私」として各々存在していたとしても、後にその細胞と完全な共働に到ったとする。そのとき、もともとの各々のミトコンドリアの単独での働きが消滅すると、それらのミトコンドリアの「私」は死んだと言えるのか。これは死んだとも、死んでいないとも言える。

(22) 中込の「唯心論物理学」におけるネットワークとしての宇宙は、モノイドとしての各人を含む普遍的な意識と言い換えてもよい。ただし彼の宇宙に、死の思想はない。それでもこの思想を敷衍すれば、各人の死はそれぞれのモノイドが窓を閉じることに過ぎず、各人の存在の消滅にはならないと考えられる。言い換えれば、消滅すべき実体としての各々の単独の個性性は、最初から無いのである。

(23) 宇宙自身が超越であるならば、宇宙自体が神であり、宇宙の外に神を求めない構図になる。たとえばS・アレク

サンダー(一八五九—一九三八)の神は、神すなわち宇宙であり、原初的な段階から精神的側面と物質的側面との両面を持つ。そこで神は宇宙そのものであるゆえに、無意味な物質という考えの方が、實在の宇宙からの抽象になる。したがって神は、無意味な物質の宇宙に対して外部から意味を与えるのではなく、物質を神の一側面という仕方で見ているにすぎない。そして神は、物質性や精神性を自らの側面として伴いつつ、「意識」そして「超意識」の創発を担い、意味をも創発させる。そこでは物質がすでに抽象なので、無意味な物質という前提が最初からない。